青木周弼旧宅

青木周弼は、江戸時代 （1603～1867）後期の蘭学（西洋医学）の名手である。瀬戸内海の大島で村医者の子として生まれ、萩藩医長のもとで漢方薬を学んだ。

30 歳で江戸に渡り、深川で坪井信道（1795～1848）のもとオランダ医学とオランダ語を学んだ。その後、長崎ではドイツ人医師で植物学者のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796～1866）に師事し、勉強を続けた。1855 年には皇室の医師に任命された。青木の弟の研蔵もシーボルトに師事した名医で、シーボルトとともに萩藩で天然痘やコレラの予防接種を始めた。

1859 年、青木は萩の実家を改築し、全国から医学生を受け入れるようになった。現在、萩城下町にあるこの旧居は、青木家の歴史を伝える資料として保存されており、その中には、倉庫から出土した青木研蔵を意味する「青研」の文字が刻まれた一分金もある。

また、研蔵の養子である青木周蔵の生涯についても展示されている。明治時代（1868～1912）に周蔵子爵と知られた彼は、日本の外務大臣であり、1906 年から 1908 年まで駐米大使を務めた外交官である。